

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 16 日現在

機関番号：32694

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2015

課題番号：25770047

研究課題名(和文) 対抗宗教改革期のフィレンツェにおける中世・ルネサンス美術の再設定

研究課題名(英文) The Reinstallation of Medieval and Early-Renaissance Art Objects in Florentine Church Renovations during the Counter-Reformation

研究代表者

伊藤 拓真 (Ito, Takuma)

恵泉女学園大学・人文学部・准教授

研究者番号：80610823

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：16世紀半ばのフィレンツェでは、サンタ・マリア・ノヴェッラ聖堂やサンタ・クロッチェ聖堂をはじめとする多くの聖堂で内部装飾の刷新が行われた。本研究では、それらの装飾刷新の過程で既存の美術作品がどのような扱いを受けたかを調査した。さらに、作品の扱いについて、16世紀半ばの美術史・美術批評的言説との対照を行い、16世紀後半の聖堂改修における壁画の保存には、作品の持つ宗教的な意味合いや美的な価値に加えて、作品が制作された時期を考慮に入れた歴史的な評価が重要な要因として作用したことを示した。

研究成果の概要(英文)：The interior spaces of many churches in Florence were renovated during a period starting in the 1560's. The most representative and well-known of these renovations were those carried out by Giorgio Vasari at Santa Maria Novella and Santa Croce. A principle aim guiding this undertaking was to provide a unified and coherent appearance in the interior of the church, involving the removal of a large part of existing decoration that had come to be considered out of fashion and disorderly. Nevertheless, despite extensive renovation, some of the art objects from the Medieval and Early-Renaissance time were preserved and even incorporated into the post-renovation displays in these churches. This research identifies various factors which led to the appraisal of these art objects, and highlights the importance of an emerging historiography of art during this period, as represented by Vasari's own Lives of the Artists.

研究分野：美術史学

キーワード：イタリア・ルネサンス フィレンツェ美術 対抗宗教改革 ジョルジョ・ヴァザーリ ドメニコ・ギル  
ランダイオ 聖堂改修 サンタ・マリア・ノヴェッラ聖堂 サンタ・クロッチェ聖堂

### 1. 研究開始当初の背景

美術作品の後世の改変や移設、再利用(以後、同様の操作をまとめて「再設定」と呼ぶ)は美術史学における主要な研究テーマの一つである。ルネサンスにおいて重要な役割を果たした古代美術の再利用は言うまでもなく(S. Settis, ed., *Memoria dell'antico nell'arte italiana*, Torino, 1984-86 など)、中世の作品が後世の宗教観・美意識に基づき改変・再利用されることもままあった(C. Hoeniger, *The Renovation of Paintings in Tuscany, 1250-1500*, Cambridge, 1995 など)。本研究が対象とする対抗宗教改革期のフィレンツェでは、再設定の事例の多くが聖堂の改修に伴って行われたという共通点を持つ。聖堂全体を統一的空间として捉える新しい美的意識が、対抗宗教改革期に提唱された一般信徒の典礼への参加を促す動きと結びついた結果、中世に起源を持つ多くの聖堂が16世紀の半ばに改修された。都市部の主要な聖堂、特に修道院付属聖堂にその傾向が顕著で、中世の聖堂空間を特徴づけていた隔壁(ルードスクリーン)は撤去され、聖職者席も聖堂中央の交差部から主祭壇の後方に移動させられた。改修された聖堂には新規の美術作品が制作されたほか、既存の作品も多数再利用されることになる。これらの再設定された作品は、必然的に制作された当初とは異なる視線に晒され、場合によっては新しい機能を付与されることになった。

フィレンツェ周辺の聖堂改修が美術史研究者の注目を集めるようになったのは比較的最近のことで、サンタ・クロチェ聖堂とサンタ・マリア・ノヴェッラ聖堂に関して、1970年代にM・ホールが発表した一連の研究に端を発している(M. Hall, *Renovation and Counter-Reformation*, Oxford, 1979 など)。ホールの研究は、改修以前の中世の聖堂の様子を再構築すると同時に、ジョルジョ・ヴァザーリによって行われた16世紀半ばの改修を詳細に跡付けた。その後現在に至るまで、E・ジュレスクやM・バッチ、D・クーパーなどによって、同時代の聖堂改修の諸事例や対抗宗教改革以前の中世の聖堂空間について、大幅な研究の進捗がなされた(C. Cresti et al., *Architetture di altari e spazio ecclesiale*, Firenze, 1995; E. Giurescu, *Trecento Family Chapels in Santa Maria Novella and Santa Croce*, Diss., New York Univ., 1997; M. Bacci, *Lo spazio dell'anima*, Roma, 2005; D. Cooper, in F. Andrews, ed., *Ritual and Space in the Middle Ages*, Donington, 2011, pp. 90-107 など)。

16世紀半ばのフィレンツェではまた、ヴァザーリの『芸術家列伝』に代表されるように、中世末からルネサンス美術に対する美術史的批評が発展した。聖堂改修に伴って行われた美術作品の再設定において、既存の作品に対する歴史的および美的価値判断が強く働いていたことは言うまでもない。ヴァザーリ

が過去の美術作品をどのような形で評価していたか、『列伝』の記述と実際の作品を対照する研究も進められているが(P. Refice, ed., *Il primato dei toscani nelle Vite del Vasari*, Firenze, 2011 など)、先行研究の多くは個別作品の論考に活用されるに留まっており、総合的分析をさらに発展させることで作品再設定の問題を考察するための有益な視点を獲得できると予想された。

### 2. 研究の目的

本研究は、フィレンツェにおける対抗宗教改革期の美術作品の再設定を、美術史・美術批評的概念の発展という観点を考慮に入れて、総合的に分析することを目的とした。研究を進めるにあたっては、サンタ・マリア・ノヴェッラ聖堂とサンタ・クロチェ聖堂における事例を中心的対象とする。両聖堂はフィレンツェにおける主要な托鉢修道院付属聖堂(ドメニコ会、フランチェスコ会)として、中世末からルネサンス期にかけて集中的に装飾されたという共通の歴史を持ち、1565年以降に行われた改修もフィレンツェにおける代表的事例を成している。さらに、改修を手掛けたG・ヴァザーリは、自身の『芸術家列伝』のなかで両聖堂の美術作品再設定に関わる豊富な言説を残している。以上の理由から、本研究の中心的対象として選択した。

上記2聖堂は16世紀半ばの改修における既存の美術作品の再設定で大きな違いを見せている点もあり、双方を比較することで有意義な知見を得ることができる。特に、聖堂の象徴的・機能的な中心であり、改修によって大幅な変更を蒙った主祭壇周辺の比較検討は欠かすことができない。実際、ギルランダイオによって制作されたサンタ・マリア・ノヴェッラ聖堂主祭壇画は聖堂改修後も引き続き利用されたが、サンタ・クロチェ聖堂のウゴリーノ・ディ・ネリオの祭壇画は撤去され、新しい聖体容器で置き換えられた。このような再設定の事例を、背景にある美術史・美術批評的概念に対する考察とともに包括的に分析する。さらに、比較対象としてサンティッシマ・アヌンツィアータ聖堂(フィレンツェ)やピエーヴェ聖堂(アレッツォ)などの事例を分析し(比較事例の選択については、次項「研究計画・方法」を参照)フィレンツェにおける作品の再設定を対抗宗教改革期より広範な美術史上の文脈に位置づけることを目指した。

### 3. 研究の方法

平成25年度には、3年間の研究の基礎とするため、関連する作品一覧などの基礎的資料を作成し電子目録化する。また、研究開始時点までに行った予備調査の結果をもとに、サンタ・マリア・ノヴェッラ、サンタ・クロチェ両聖堂の主祭壇周辺の分析を進める。平成26年度には、上記2聖堂における美術作品の再設定と同時代の美術史・美術批評的言

説の対照を行うとともに、他のフィレンツェの諸聖堂との比較検討を行う。最終年度には、研究の成果をより広範な美術史上の文脈に位置づけることを目標とし、フィレンツェ以外の諸都市における事例との比較を通じ、イタリアにおける対抗宗教改革期の聖堂改修全般の文脈におけるフィレンツェの事例の位置づけを分析する。以上の調査を遂行するために、作品を所蔵する美術館や聖堂管理局などの関係機関に協力を求めつつ、作品調査、資料収集のため各年度2回前後の海外調査を実施する。

#### 4. 研究成果

初年度である平成25年度は、サンタ・マリア・ノヴェッラ聖堂およびサンタ・クロッチェ聖堂(フィレンツェ)について、研究の対象とする範囲を明確とするための基礎調査を行った。具体的には、改修前の両聖堂に制作されたことが判明している作品をリスト化するとともに、改修の時点で制作された祭壇画についても現状の確認を行った。E. Giurescu, *Trecento Family Chapels ...*, Diss., 1997 や M. Hall, *Renovation and Counter-Reformation*, Oxford, 1979 を主たる資料とし、各種のモノグラフなどで情報を補完した。また当初の予定通り、聖堂改修後のサンタ・マリア・ノヴェッラ聖堂の主礼拝堂の装飾の変遷について、特に集中した調査を行った。同聖堂修道院付属古文書館での調査では、礼拝堂の18世紀末の様子を詳細に記述した史料を発見し、現在は各地に散逸している主祭壇画の再構成を行うことが可能となった。同作品は15世紀末にギルランダイオによって制作されたが、16世紀の聖堂改修で場所を変更されたうえで、19世紀初頭まで使用され続けた。諸聖人の姿を描いた主要画面の再構成について、現在一般に受け入れられているものとは異なる配置が18世紀当時になされていたことを特定し、16世紀後半の聖堂改修との関連を分析した。また、プレデッラについても図像内容の全貌を明らかとしたうえで、新たに3パネルをその一部であると特定した。聖堂改修の前後における同祭壇画の移動については、『恵泉女学園大学紀要』26号(2014年)掲載の論文で論じた。

平成26年度には、25年度に作成した関連作品目録を基礎資料とし、16世紀半ばの美術史・美術批評的言説との対照を行った。主たる分析対象とするヴァザーリの『芸術家列伝』では、初版と第2版の対比を行うために、両版を収録したバロッキ版(P. Barocchi - R. Bettarini, eds, Firenze, 1966-)を底本とし、関連個所の特定を行った。その他のヴァザーリの書簡やボルギーニなどの関連人物の言説に関しても、K. Frey, *Der literarische Nachlass Giorgio Vasaris*, Muenchen, 1923-1940などを参照した。また、夏季および春季にフィレンツェにおける現地調査を行い、先行研究の収集、作品の実見などを行

った。特に関連聖堂に由来する壁画作品に関する調査を重点的に行った。また次年度以降の研究に備えて、同時代に行われたフィレンツェの諸聖堂の改修を比較対象として調査した。なかでも、サンティッシマ・アヌンツィアータ聖堂を重要な検討対象として、関連作品の文献調査などを行った。サンタ・マリア・ノヴェッラ聖堂主祭壇画(ドメニコ・ギルランダイオ作)に関しては、昨年度に行った調査にさらなる追加的調査を行い、その内容を International conference Space in Renaissance Italy organized by Villa I Tatti で口頭発表を行った上で、*Mitteilungen des Kunsthistorischen Institutes in Florenz*誌に論文を掲載した。

最終年度である2015年度においては、夏季のフィレンツェ調査、冬季のローマ・ベルリン調査などを通じて実施した文献調査・作品実見の内容をもとに、前年度までの研究の知見をより広範な文脈に位置づけることを目指した。その結果として、16世紀後半の聖堂改修における壁画の保存には、作品の持つ宗教的な意味合いや美的な価値に加えて、作品が制作された時期を考慮に入れた歴史的な評価が重要な要因として作用したことを示した。また、諸聖堂の改修は聖堂内部に統一した装飾を施すことを目的の一つとしていた一方で、現実的には必要に応じて様々な方策を採用しながら、聖堂内部の新しい姿を作り出していくことになったことを跡付けた。これらの研究成果の一部は、『ヴァザーリ時代の史的美術批評とフィレンツェ諸聖堂改修における Fresco 画の保存』、『恵泉女学園大学紀要』28号、2016年として発表した。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計3件)

伊藤拓真「ヴァザーリ時代の史的美術批評とフィレンツェ諸聖堂改修における Fresco 画の保存：ポッティチェリ、ギルランダイオ、マザッチョ、ドメニコ・ヴェネツィアーノらの壁画を中心として」、『恵泉女学園大学紀要』、恵泉女学園大学、28号、2016年2月、pp. 107-141.

Takuma Ito, "Domenico Ghirlandaio's Santa Maria Novella Altarpiece: A Reconstruction," *Mitteilungen des Kunsthistorischen Institutes in Florenz*, Kunsthistorisches Institut in Florenz (Firenze), 56 (2), 2014.11, pp. 171-191.

伊藤拓真「サンタ・マリア・ノヴェッラ聖堂(フィレンツェ)主祭壇周辺空間の再設定：ギルランダイオおよびバッチョ・ダー

ニヨロによる両面祭壇画制作からヴァザーリによる聖堂改修まで』、『恵泉女学園大学紀要』、恵泉女学園大学、26号、2014年2月、pp. 177-208.

〔学会発表〕(計1件)

Takuma Ito, “A Reconstruction of Ghirlandaio’s Double-sided Altarpiece: Space and Lighting in the Choir of Santa Maria Novella in Florence,” International conference *Space in Renaissance Italy* organized by Villa I Tatti, The Harvard University Center for Italian Renaissance Studies, 16 – 17 October 2014, Harvard Center Shanghai, Shanghai .

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

伊藤 拓真 (ITO, Takuma)

恵泉女学園大学・人文学部・准教授

研究者番号：80610823

(2) 研究分担者

( )

研究者番号：

(3) 連携研究者

( )

研究者番号：